

佳作

言葉が持つ力

宮城県登米市立東和中学校

1年 佐藤 碧空

私はこの春、中学校へ入学した。学校へは自転車に通っている。最初は一人で通学するつもりだったが、友達と一緒に走ろうと誘ってくれた。嬉しかった。でも、私は全て人より遅かった。起きるのも、支度も、自転車をこぐのも……。

「友達を待たせて迷惑をかけるくらいなら断りなさい。」と母に言われた。通学は一日、二日じゃない。毎日のことである。しかも、ちゃんと足が着かない自転車は、右へ左へと揺れ、真っ直ぐこげなかった。母の言うことはもっともだった。でも、友達と一緒に通いたかった私は、習い事のない日は走ることにした。ただひたすら30分、ゆっくり走り続けた。そのかいがあつて、友達との待ち合わせ場所まで20分かかっていたところ、2カ月後には10分にまで縮めることができた。小さな成果だが嬉しかった。そんな時だった。3年生の先輩に「碧空ちゃん、一緒に駅伝やらない？」と声を掛けられた。ん！ え！ は？ 衝撃的な誘いだった。私は、お世辞にも足は速くない。ゆっくりは走れても競争は無理だ。家に帰って、そのことを家族に話すと、家族も「は？」と驚いていた。声を掛けてくれた先輩は、誰もが認める俊足のアスリート。小学校の頃から知っている憧れの存在。とてもじゃないが、同じ舞台には立てない。それに、中総体を終えて、私はふくらはぎや足の裏の痛みがひどかった。

少しして、今度は体育の先生に、市陸に出ないかと声を掛けられた。やはり足の痛みがひどかったので一度は断ったが、ミーティングだけでもと誘われて行ってみると、そこに先輩もいた。ふと、あの言葉を思い出した。何の取りえもない私を推してくれた先輩……。私でも頑張れるかな？ どこまでできるかわからないけど、やってみようかな。すぐに家族に相談した。大反対された。痛みのある足での陸上練習や駅伝、その間にある期末テスト。「お前はそんなに器用なのか？ あれもこれもできるのか？ 無理だ。」と。それでも食いさがって話し合った。最終的には認めてもらったが、それを理由に送迎をしたり、習い事やテスト勉強がおろそかになったりすることがあつてはならないと言われた。つまり、チャレンジするからといって特別扱いはいらないということだ。

ここから自分との闘いが始まった。市陸は、瞬発力に欠けるので短距離やリレーはダメ。800メートルも、スピードと持久力がない私はダメ。チャンスがあるとすれば、1500メートルかと思い、それにした。練習は当然きつかったが、先輩や先生がいつも励ましてくれたので、頑張れた。小さい頃から、徒競走は

最後まで走れば万々歳だった。小学校から習い始めたバドミントンも、まだ結果は出せていない。どんなに頑張っても上には上がいるからだ。「努力は必ず報われる」なんてウソだと思ってきた。しかし、思わぬ形でそれは実現した。地道な努力が、県大会出場という結果をもたらしたのだ。言葉の持つ力はすごい！ たった一言で、やる気も力も湧いてきて、苦しさもはねのける。そして、新しい自分を発見するきっかけをくれたのだ！

常に周りに気を配り、励ましてくれた先輩。私の憧れはますます強くなっていった。強さとは何か。先輩の背中を追っていくうちに、優しさだと気付かされる。ついに先輩と同じ舞台に立った駅伝大会。最後の試走の前日、1区を走るはずだった3年生がケガをしてしまい、出られなくなった。先輩たちは皆泣いていた。1区は1年生に託された。その時だった。「1年生が頑張りますと言っている。速いとか遅いとかはどうでもいい。駅伝は一人じゃない。トップと2分の差があるなら、一人15秒縮めてこい。それで1分。仲間のため、出られなくなった友のために、1秒でも速く最終走者にたすきを渡せ。必ず入賞できる！ 仲間を信じろ！」先生の熱い言葉がチームに響いた。その言葉に私の心は震えた。私よりも速い人はたくさんいる。それでも私を信じてここまで引っ張ってきてくれた先輩。絶対につなぐ！ そう思った。

迎えた本番。一人一人が持てる力を発揮し、たすきは最終走者の先輩に渡った。応援する沿道から折り返し地点は見えない。先輩を信じて待った。遠くに見えたのは自分と同じユニフォーム！ 先輩は前の走者たちをごぼう抜きして2位でゴール！ 駅伝は孤独でつらい。しかし、沿道からは学校や性別に関係なく温かい応援の声が飛ぶ。「頑張ってください！」と、懸命に取り組む人に敬意を払う。そんな同年代の選手たちの姿にも胸が熱くなった。参加して、良かったと心から思う。

未来の自分に伝えたい。努力は絶対に裏切らない。己と仲間の言葉を信じ、突き進め！ 未来を切り開くのは、自分の弱い心に勝った者！ 自分で歩いて道を作れ！